悪魔の選択

クローバー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
悪魔の選択

【Ｎコード】
Ｎ８６５２Ｌ

【作者名】
クローバー

【あらすじ】
魔法で戦争を続けるとある世界のとある王国、その国の王子から使い魔として召喚された悪魔のアクは、勝利のため王子の婚約者を見捨てる、という心が無い悪魔故の非情な選択をしてしまう。
主である王子は深く傷つき、アクもまた深く悩む。
そんな中、再び選択を迫られたアクは何を選び何を捨てるのか……
心という壮大なものをテーマにした短編となっております。

第三次魔道大戦。
今の時代を一言で表すのなら、そう言う言い方になる。
その名の通り世界の列強国達は魔法の力を使い他の王国と戦争を続けていた。
何百と名乗りを上げた国々は第一次、第二次と続いた大戦で次々と消されていき、第三次を戦っている国はもう指で数えられるほどに減っていた。
そして第三次の大戦中、とある国を滅ぼした大きな戦い。
勝利者であるはずの王国は、勝ったにもかかわらず、一切勝鬨を上げようとはしない。
ただ、激しい雨だけが降り続く。

私にはわからなかった。
なぜこんなことになっているのか。
なぜ、我が主が、ここまで苦しんでいるのか。その理由を私は理解できない。
「なぜ、なぜなんだ……」
頭を抱え、膝をつき、頭を地面にこすりながら涙を流す。
白い絢爛豪華な衣装、長くきれいな金色の髪も泥で汚れていく。
彼は私に向かって泣き叫ぶ。
「なんで彼女を見殺しにした！」
「我々の勝利のためです」
そういうと今度は罵声を浴びせられるだけでなく、勢いよく平手で殴られた、頬の水が弾ける音と一緒に痛々しい音が響いた。
主が望んだ勝利だというのに、なぜか喜ばれず、ましてや殴られ

までしなければならないのか。私には理解ができない。
わけがわからない。
「彼女は僕の婚約者だぞ！　お前はなんとも思わなかったのか！」
「はい？　彼女は私に構わないでと言っていたではありませんか、それに彼女の命と我が軍の勝利、比べるまでもないかと」
また、殴られた。
今度は拳を固く握っていた、別に痛くもないが、さすがにわけがわからない。
ただ、敵軍が彼女を人質に取って、その隙に何か怪しい動きをしていたようだから、私はそれを防ごうと、彼女を見捨てて敵軍を薙ぎ払った。
結果。敵軍の策を破り、我が軍は勝利を得たというのに……。
なぜ我が主はこんなにも涙を流し、苦しむような声を上げながら私を殴るのかわからない。
「愛する者を失って、悲しくないわけがない！！　お前は……何も感じないのか！」
「はい、私はしがない使い魔ですので、心などは持ち合わせておりません」
「貴様……この、このぉぉぁぁぁぁ！」
主が大きく振り上げたこぶしを周りの兵士たちが抑えこんだ、さすがにやり過ぎと判断したのかもしれないが、悪魔である私にとって人間の拳などが通るはずもなく。
ただ汚れがつく程度のものだった。
「リリアーヌっ……リリアーヌ……うぁぁぁぁぁぁぁ！」
愛する者の名前を叫びながら主は兵士たちによって後方の本陣へと連れられて行く。
それにしても、これほど取り乱す主を見るのは初めてだった。
我が主は、人間からみればとても優しい人間なのだと思う。
温厚で人を傷つけるのを嫌い、戦争なんてのには正に不向き、と言ったところか。

悪魔である私をまるで人間のように扱い、倒れている者はたとえ敵でも助ける。
そんな甘さを持った主が、これほどの怒りをを見せるのはやはり相当な事をしてしまったに違いない。
だが私にはわからない。
それは心が無いからなのか。
私が悪魔だからなのか。
それさえもわからない……

初めて私が召喚されたのはもう八年も前の話になる。
この国では伝統として次期王が成人（十二歳の誕生日）の際、強力な悪魔を使役することになっている。
それが今回私だった、というわけだ。
「これが僕の使い魔か。えっと……」
「我が主よ、私の名前はお好きなようにお呼び下さい」
「ん～、じゃあ小悪魔からとって……アクでいいかな？」
「お好きに」
なんでも私の事が小悪魔に見えるらしい。
背中の小さな羽とか、肩にかかる程度の赤髪が小悪魔っぽい。そんな事を言っていた。
これでも大悪魔なのだが、そんな事は言っても仕方がない。
すでに第二次魔道大戦終盤であったが、私は主の命令に従い、大戦を戦い抜いた。
私はこんな化け物だというのに、主は人として扱う。
姿は人間界になじむため、十代後半の若い女の姿をしているとはいえ、戦いになればゴミのように人間を蹴散らすのだ。そんな奴相手に親しく接するなんて、珍しい人間もいるもんだな、そう思っていた。

だが自然と、いつも主と一緒にいることで何かを感じ始めていた。
胸の中に沸く、よくわからない何かを。
でも、やっぱり理解することはできない。

それからの日々、戦いに明け暮れる毎日。
主とともに戦い、その何かを感じることも増えてきていた、なのに、私は大きく間違えてしまったらしい。
第三次大戦中の戦、主の婚約者を見捨てたことが相当いけなかったようだ。
なぜだろう？　勝てばいつも主は喜んでくれたのに、今回ばかりはあんな顔を見せた。
あんな表情で殴られた。
婚約者など、主の地位でもってすればいくらでもいるだろうに……
なぜだろう、殴られたのは顔なのに、胸が痛い。
戦闘で負傷もしていないのに、あの時の主の顔が思い浮かんでは胸が痛い。
私はどうなってしまったのだろう、消えてしまうのだろうか……

太陽が昇る、今日も戦だ、主を起こしに行かねば。
私は王宮の長い廊下を歩き、主を起こしに行く。
だがその必要はなかったらしい、部屋の扉を開けると、すでに主は起きていた。
というよりは寝ていなかった、と言う方が正しいと思う。
目には濃い隈ができていた。
「睡眠不足はお体に障ります、しっかりとお休みになられないと」
「それをお前がいうのか？」
あの顔だった。
私には主を守る役目がある、体の心配をしただけなのに、なんで、

なんで
なんでまたあの顔をする……
また私の胸を痛みが襲う、やはり知らぬ間に負傷でもしていたのではないのか。
しかし体に不自然なところは無い、本当になにがあったんだろうか……
「っ……すまない、アクは僕を心配してくれただけなのにな」
「い、いえ」
それからも、私と主の関係が元に戻ることはなく。
望めば簡単に手に入る婚約者も、主は望もうとはしなかった。
意味が分からなかった、代えはいくらでもいるのに、たった一つ失っただけではないか、なんで私が……
ふつふつと胸に湧き上がる何か、煮え切らない。
落ち着かない、じっとしていられない。
それがよくわからない、こういうことなら人の考えが分かるように思考パターンを学んでおくべきだった。
そう後悔する。
とりあえず主の行動原理を理解しようと心理学の本を読んでみる。
『人と上手に付き合う方法』
上手に気を使う、よくわからない。上手にも何もその場にあった言葉を発せばよいのだから、そもそも気を使う必要などないはずだ。
『異性にモテる方法』
男性には小悪魔的な態度で接すると吉。
そもそも私は小悪魔だ、いや、大悪魔だった。
『愛、それが真理』
ビリビリと。
大きな音を立てて私は本を引き裂いた、およそ見た目は華奢な女の子だが、やっている事は雑誌破りという、豪快かつ激しい行動だった。
勿論中身は見ていない。

表紙を見ただけで破いてしまった、なぜかわからないがそうしたくなった。
――結局。
私が主の行動を理解する事は出来なかった。

戦争も終盤に入り、圧倒的力を持つ我が軍は次々と他国を征服、天下統一をかけた大戦も終始有利に戦いを進めていた
「私の出る幕は無さそうですね」
「……そうだね、アク」
なぜか主は、空を見上げ涙をこぼす。
まただ、勝ちは決まったようなものだというのに、主は涙を流す。
「君にも見せてあげたかったよ、この勝利を……リリアーヌ」
ああ、私のせいなのか。
そう思った。
あれからまだ引きずっていたのか、彼女の死を……
胸に痛みが走ったその時だった。
不意に魔方陣が主の足元に現れる、敵の転送魔法だった。
主の姿が一瞬にして消え、敵陣の上空へ移動した。
上空に浮いている敵兵士に抑えつけられ、のど元にナイフを当てられている。
――完全に私の失態だった。
周囲の魔法感知も私の担当だったというのに、どういうわけか感覚が鈍っていたらしい、一切気がつく事が出来なかった。
「アク！　僕に構うな！　僕ごとやれ！」
確かにここで主ごとやれば戦いには勝利する、次期王は弟君に決まるから大した混乱も起きないだろう。
いい事ずくめのはずだった。
なのに私は行動を起こせずにいた……主の婚約者の時は動けたの

に。
今回ばかりは動けない……なぜ？　王国を思えば結論は決まっているはずだった。
「ぜ、全軍攻撃中止！！」
気がつけば声を荒げて命令を下していた、相手の思うように、いいように使われていた。
私らしくない判断だった。
「アク……」
「すみません、私……」
負けた、初めて。
たった一人の人間のために、全員武器を捨てて降伏。
圧倒的力を持っていた我が国は初めて戦に負けた。
戦に勝たせることが私の使命だったというのに、私は、最後の最後で、自分の存在理由を失ってしまった。
誓いを破った使い魔は契約を解除させられ、強制的に人間界から退去させられる。
私はこの世界から消える。
全員の武器を取り上げた敵軍は、主を開放した。
私は真っ先に主の元へと駆け寄った。
こんなことになってしまったのは自分のせい、謝らなければ……。
「すいません、私……何て事を……」
怒られると思った。
罵られると思った。
でも違った。
「謝るなアク、戦いには負けたけど、僕は嬉しかったよ」
いつもの、優しい笑顔だった。
あれからずっと感じる事のなかった何か、胸にあふれてた。
「アク、泣くな」
「……え？」
わからない、心などありもしない悪魔である私が、涙など流すは

ずがなかった。
眼元へ手を当てると、液体が指先に触れた。
涙、だったのかもしれない。
突然、主は私を自分の胸へと引き寄せた。
ぎゅっと、強く、力のこもる腕はかすかに震えていた。
ああ、契約が解除されてしまったから、私は消えかかっているんだ。
体が徐々に消えていくのが分かった。
「すいません……誓いを破ったために、私はもうこの世界にはいられないようです」
「アク……アクっ！」
嫌だな……
そう思った。
まだ主と一緒に居たい。
そう思った。
「私……離れたくないよ……っ！」
思わず、声に出てしまっていた。
何を考えているんだろう、馬鹿か私は。

どうして涙が止まらない。

「ああ、僕もだよ、今までごめんね……つらかっただろう？　君にもちゃんと心があったのに、僕はつらくあたってしまって」
ここ、ろ？
そうか、これが心……か。
時々感じていた何かや、胸の痛み、怪我じゃなかった、心だった。
そしてそれを与えてくれたのは、主だった。
これまで途方もない年月を生きてきたが、こんな感覚になるのは、生まれて初めてだった、こんな……温かい気持ちは。
今の自分の中の心を、飾らずに、そのまま口にする。

「――ありがとう」

これでお別れなのだけど……もし、もしまた出会えるのなら。
我儘だけど、またあなたと出会いたい。
私に心をくれた、大切なあなたに。

（後書き）

これが初めての作品になるクローバーです。

初めてなのに、心という壮大なテーマにしてしまいました。
こうやって書き終えてみると自分の文章力の無さに悲しくなります
……
もっともっと上手に伝えたい、そう思うのですがなんとも……上手
くいきませんね
もっと努力しなければ……！

そしてこの小説を最後まで読んで下さった方々、本当にありがとう
ございました。
感想など書いていただければ、今後の参考にしようと考えています。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8652l/

悪魔の選択

2010年10月8日14時45分発行